

令和 5 年 6 月 8 日現在

機関番号：32675

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2022

課題番号：15K21448

研究課題名（和文）社会的課題を抱えた現場での応用演劇実践を活用した外部支援者の役割に関する研究

研究課題名（英文）Research on the role of external supporters by using applied theater practice in the field with social problems

研究代表者

石野 由香里（ISHINO, Yukari）

法政大学・大原社会問題研究所・研究員

研究者番号：20734081

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では身体をもって他者をなぞり演じることで、自他の「間（ハザマ）」に立ち、省察を経て自分の主観的なモノの見方の枠組が変容していくという実践原理を解明した。さらに、演じ手だけではなく観客も先入観に囚われず他者を捉えるようになる作用も明らかにした。この作用を社会的課題を抱えた現場に応用することで、関係集団や関係地域社会の抱える様々な亀裂、対立をボトムアップに、部分から全体へと広げる形で変容させて、問題を溶解させたり突破したりする可能性を切り開く現実的な方法の基礎論を示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、第一に、これまで分断されてきた応用演劇研究と俳優の演技論の研究と方法を統合的に取り入れ、さらに演劇教育研究を社会教育研究の領域へと接続し、発展させた。第二に成人学習の領域における変容的学習理論と、人類学/社会学の質的調査法を用いることで演じることを通した学びの研究を深化させた。第三に以上の知見を地域研究に応用することで発展させた。「省察を経て自分の主観的なモノの見方の枠組が変容する」という演じることの実践原理を解明していくことで、現代社会の無関心、無理解、対立、差別が問題になる場面への応用可能性を示した。今後、地域社会はもとより、様々な関係集団の抱える課題への貢献が期待される。

研究成果の概要（英文）： In this research, the author examines how one's perspective can change by tracing the other person with the body, standing in between oneself and others, and through reflection. She also demonstrates not only the performers but also the audience can understand others better without being biased by using this method.

This paper also explores the method as a realistic solution to open up new possibilities for dissolving or breaking through social problem originated from group or community conflicts by transforming them to be more widely applicable and discussed.

研究分野：応用演劇（演劇教育）

キーワード：他者理解 よそ者 地域 応用演劇 演劇教育 ワークショップ 援助

1. 研究開始当初の背景

「よそ者」の特徴を活かした地域活性に関する研究において、寄り添い型・エンパワーメント型の支援の重要性が指摘されてきた。申請者は地域に暮らす住民自身がエンパワーメントされ、それまで気付かなかった課題を自ら発見し、解決法を考える仕組みづくりのための研究をおこなってきた。その際に用いるのは、応用演劇・演劇教育の領域における演劇的手法である。ここでは、自らが自分自身のことを語るのではなく、理解することの困難な他者に対して寄り添う努力をし、代弁する(演じる)ことにより生じる効果に着目する。その理由は、演じることの異化作用により自分と異なる価値観を持つ他者を受け入れやすくなると同時に、新しい視点で現実を捉えなおせるようになる作用が期待できるからである。そのことにより対話を促し、課題解決へ向かわせる原動力となると想定した。

一方、演劇研究は芸術/目的としての演劇に関する研究と、非芸術/方法としての演劇に関する研究の2つに大別できる。非芸術/方法としての演劇には、演劇を手法として社会に活かす応用演劇や、教育に活かす演劇教育という領域がある。しかし、両領域には、未だ研究方法が確立されておらず、実践報告に留まりがちだという課題がある。そして、両領域においては、他者を演じることで別人の視点に立つことによりモノの見方・捉え方が変化する(=自己変容が起こる)ことの重要性は認識されているにも関わらず、その変容のメカニズムについては必ずしも十分に解明されてこなかった。

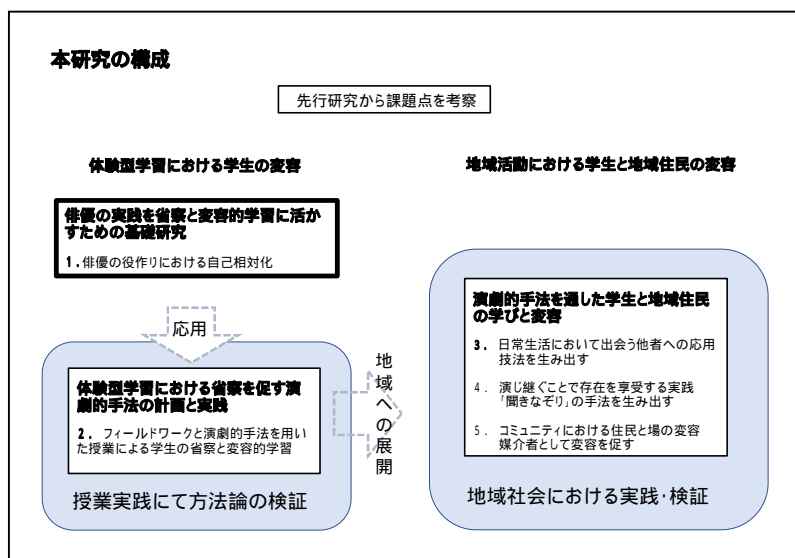
地域活性の文脈において、この変容のメカニズムの解明を必要と考えるのは以下の理由による。すなわち、価値観の異なる他者と協同する場面の多い現代的な地域社会において、私たちは自分のモノの見方を前提とし、無意識に自らの価値観を相手に押し付けてしまうために、しばしば誤解やトラブルが生じる。それを回避するために必要となるのが、自分の他者に対する視点・思い込み・前提を疑い、捉えなおすプロセスであり、その結果、これまでの自分のモノの見方が変化することを「自己変容」と定義する。

2. 研究の目的

本研究の目的は社会的課題を抱えた現場に演劇的手法を活用することにより、これまで気づかれなかった新たな課題が発見され、住民相互/住民と外部支援者との間の対話と相互理解を促す可能性とその要因を明らかにすることである。

本研究の主たる実践現場、及び調査対象地となる過疎高齢化が進んだ団地等に類似する現場は、全国に数限りなく存在する。そこでは、住民をエンパワーする役割を担う存在としての外部支援者の関わり方が課題になっている。本研究において具体的な方法論とモデルを提示することは重要な作業となるだろう。

3. 研究の方法



本研究の進め方を左図に示す。まず、先行研究から、当該分野の課題点を明らかにする。次に、その課題を乗り越えるための方法論を開発し実践、検証をおこなう。手順としては、大学の授業(体験型学習)で試行したのち、その分析結果をもとに発展させた内容を地域社会で展開する。以上の概要を踏まえて、各段階の内容について記す。

はじめに、自己変容に関する研究が深まらない理由を先行研究から分析した。そこから導き出された

課題点と、それを乗り越える方法を以下に3点示す。

(1) 先行研究では自己変容を明確に定義していなかった。そのため、たとえば学校教育において、「いじめられっ子」を演じる実践がおこなわれた際にも、「いじめられる側の気持ちが分かった気がする」という演じ手の感想は記述できても、何をもって変化を評価するのか不明確であった。それに対し、申請者は教育学の変容理論を参照し、他者を演じることで他者に対する自分の

視点・思い込み・前提を疑い、捉えなおすプロセスをへて、これまでの自分のモノの見方が変化することを「自己変容」と定義した。

(2) この定義にもとづき考察した結果、ロールプレイなどの既存の方法論には「いじめられっ子」に対する演技手の思い込み・前提を疑うプロセスは明確に組み込まれていないことがわかった。それに対し、申請者は他者の言動を写實的に再現するという新しい演技方法を開発することにした。この方法には、いじめられる状況そのものを詳細に観察したうえで無心に出来事を再現することにより、「いじめられっ子」に対する自分の先入観に気づき、相対化する作用が組み込まれているようにした。

(3) 演劇教育研究の多くは学校教育の時空間に限定されていたのに対し、学生と地域住民を対象に地域社会や日常生活へと調査フィールドを拡張して「なぞる」手法を実践することで、継続的な調査データを蓄積した。そして、人類学・社会学的質的調査法を駆使することで変容プロセスを解明し、「なぞる」手法の作用を解明した。

具体的な研究方法としては、次項目で詳述するように、インタビュー、オートエスノグラフィー、エスノグラフィーの質的調査を用いた。

4. 研究成果

(1) 演技論に関する国内外の先行研究、および俳優へのインタビュー調査の結果から、俳優の役作りのプロセスにおいて自己変容が引き起こされるために必要な4つの要素を明らかにした。

(2) この4要素を含み、かつ素人にも実践可能な演技法＝「他者をなぞるように演じる」(＝他者の言動を写實的に再現する。以下「なぞる」方法)を開発した。そして、この方法を用いた授業を実践し、約百名の履修生を対象にしたリアクションペーパーを分析することで、この方法の作用を明らかにした。

授業の概略は、履修生から『『ひっかかり』を覚えた実際の出来事』を募り、「なぞる」方法を用いて演じるというものである。「ひっかかり」とは、言語化できず善悪などの判断もつかないが、何か心にひっかかりを感じる体験を意味する。具体例として、聴覚障害者の支援ボランティアをしていた履修生は、支援を拒否された経験の原因を相手側に求めていた。しかし、「なぞる」方法で相手を演じることを通して、自分の中に潜在的にあった偏見の存在を発見した。「障害者」という枠組みに当てはめて相手を認識した途端に、私たちは先入観に囚われるという本質的なメカニズムに気づいたのである。ほかの事例も同様に、他者に対して当てはめていた枠組みの存在に気づき、自分の見方を相対化することで、先入観に囚われずに相手を捉えるように変化した。

(3) 次に、この方法を日常生活や課外活動で継続的に実践した3名の履修生に対し、インタビュー、オートエスノグラフィー、エスノグラフィーなど様々な手法を用いて数年間にわたり調査した。

その結果の具体例として、履修生の1人は、台所のハサミの置き場など「些細なこと」に対して度々小言を繰り返し、夫婦喧嘩にまで発展させる母親を「些細なことにこだわる人」と長年にわたり否定的に捉えていた。しかし、母親の日常をなぞるように演じてみた結果、台所は彼女の生活世界の大半を占め、秩序を保つことがいかに大切であるかを実感した。台所の環境は、学習環境(自分)や職場環境(父親)と等しく尊重されるべきものであると気づき、「些細なこと」と捉えていた自分の視点を相対化した。このように、身近であるがゆえに「分かっているつもり」になり、相手に対する認識を思考レベルで修正することは困難であるのに対し、身体感覚の変容をも促す「なぞる」手法は独自の有効性を示した。さらに、恋人との関係や、過去にいじめられた体験など、あらゆる場面・相手に対しても視点を相対化する習慣がついた。その結果、フラットな視点から相手の価値観を尊重したコミュニケーションをとれるように変化し、人間関係全般も潤滑になった。

(4) さらに別の履修生の1人は、高齢化の進んだT団地(東京都郊外)にて「なぞる」方法を独自に発展させ、新たな方法を生み出し展開した。彼女は高齢者のライフストーリーの聞き取り実践と「なぞる」方法を重ね合わせ、地域住民の前で上演した。観客へのグループインタビューおよび個別インタビューの結果、ライフストーリーの語られる身体・空間ごと忠実に再現することを試みるこの方法には、自分と他者の相違性を認めたまま、「共有」という新たな他者了解の可能性が示唆された。この学生が高齢者の語りを再現する姿を観た地域住民である観客は、「80代のご婦人にはこういう特徴がある」「Aさんはこういう人」など、自らの他者に対する枠組みを揺さぶられ、他者を自らと連続して捉えられる作用がみられたのである。

(5) 次に、同じT団地のコミュニティ内で起きた差別・排除をめぐる出来事を学生たちが再現し、フォーラムシアターという参加型演劇の方法を用いて上演した。その結果、観客や演者として参加した地域住民らは、それまで野次や威嚇的な態度など「問題行動」ととることで危険視し

ていた人物(=Jさん)に対し、その人物の行動に問題があるだけでなく、自分たちの偏見と、それに基づく行動が「問題行動」を誘発していたと気づき、態度を改めたことで両者の関係性は改善した。また、実践内容を分析することで、「なぞる」方法のもつ 演者のみならず観客にも自己変容(=自分の見方を相対化することで、先入観に囚われずに相手を捉えるように変化)を促す作用、 演じる対象を入れ替えながら演じ合うことで互いの自己変容を促進する作用について明らかになった。

(6)上記の事例において、よそ者である学生=外部支援者による作用について以下の3点を明らかにした。

第一に、よそ者の視点でひっかかりを覚えた場面を切り取る手法は、住民からは提案されないような課題を抽出する可能性をもつ。この事例も、Jさんの存在は住民の中で固定化しており、学生の発言によれば「互いは『違う』からと認識することで関わらないことをよしとする」ことの常態化する中、住民の目線からは、このテーマを取り上げて対話する発想は生まれなかったと考えられる。

第二に、学生が取り上げた再現内容は、よそ者が演じたからこそ住民に受け入れられたという側面もある。ある関係性に絡み取られている内部の人間から提示された場合には、フラットに受け取ることが難しかったと推測できる。

第三に、学生たちは発表会の準備の過程で再現を繰り返しながらJさんの立場にも立ち、視点を相対化している。住民たちは学生たちの演じる姿を観ることで、Jさんに対する学生たちのパースペクティブは自らのものとは異なることを知り、省察するきっかけになったと考えられる。それは、他者を演じている姿には、他者に対する演じ手のパースペクティブが反映されるからである。以上のことから、よそ者が先述の第一と第二の特徴を活かし、他者への視点を相対化した上で演じるとき、媒介者として住民の変容を促し得ることが明らかになった。

この事例を通して、住民同士の軋轢や不理解に対し、演劇的手法を用いて「よそ者」が媒介することによる作用についてみてきた。第一に、地域住民にとって常態化している人間関係や出来事をよそ者独自の視点から切り取り、第二によそ者という立場を活かしてその内容を提示し、第三に演じることにより出来事を相対化するプロセスを開示することで住民の変容を促す可能性を見出した。同時にそれは、よそ者としての学生の学びにもつながっているのである。このように、演劇的手法は様々な立場の者が共に学び合う空間を形成することで、コミュニティに変化をもたらす可能性を有していると考えられる。

(7)流動的な住まい方を余儀なくされる現代において、「これまでの生活環境、文脈を同じくしない人」との対話と共存のあり方は課題となっている。それは、これまで比較的同質的な人々と暮らしていた日本の地域文化における急激な変化であり、それに対応するためには何らかの方法、技法が求められている。とりわけ、地域住民間で価値観の異なる人、合わないと感じる人を排除する現象に対し、本書で提示したアプローチは今後の地域づくりや地域活性の分野・現場に示唆を与え得るだろう。

さらに、価値観の異なる他者を排除するメカニズムについて、自らの他者に対するパースペクティブが変容することにより回避し得るという視点から、変容を引き起こす具体的な方法と理論を実践調査データから導き出した。これは広く他者との関わり合いが生じる日常生活、仕事、教育等の現場に実践的に用いられるものであると同時に、多文化共生、インクルーシブ教育、育児や介護など社会的テーマに挑む諸学問領域にも示唆を与えるものである。

本研究は他者理解という普遍的なテーマに深く切り込み一般化したことにより、演劇的知を理論・実践の両面において他領域にも応用可能な内容に引き上げたと言える。本研究で開発・実践した演劇的手法は他者が関わるあらゆる現場の活動や省察に用いることを可能とし、広く汎用性が見込まれる萌芽的研究である。このことにより、今日的な演劇教育研究の置かれている状況、すなわち合目的に演劇が用いられ、その実践はコミュニケーション教育等の文脈や教科を教える媒体・教育方法として残存していくという傾向を食い止め、より広い意味での学び、つまり社会の中で自らを捉え直し、他者と共に生きていくための力を培う可能性を示すことで、同分野の応用可能性を上げた。

以上、従来の演劇教育研究の限界点に対し、その研究対象の拡大、それに伴う演劇的手法の開発と実践、調査方法の改善を行い、これまで分断されがちであった実践と研究を連続的にを行い、教育学・人類学・地域活性論・ボランティア学・演劇論などへ架橋することで同研究の可能性を押し広げた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 4件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 Yukari ISHINO	4. 巻 9
2. 論文標題 “ A Study on the Theatrical Method for Transformative Learning ”	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Drama Research: international journal of drama in education	6. 最初と最後の頁 1-18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 Yukari ISHINO	4. 巻 vol23.1
2. 論文標題 “ Acting and seeing the world through someone else 's eyes :about continuity of fiction and non-fiction ”	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Drama (National Drama 's magazine of professional practice)	6. 最初と最後の頁 35-38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 石野由香里	4. 巻 27
2. 論文標題 演じる行為が自己相対化と他者理解を促す効果 問題発見型フィールドワークで遭遇したシーンを再現する手法の開発	5. 発行年 2015年
3. 雑誌名 生活学論叢	6. 最初と最後の頁 17-28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24528/lifology.27.0_17	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 石野由香里	4. 巻 62
2. 論文標題 学生と高齢者 異なる者同士の「引き出し合う」関係	5. 発行年 2015年
3. 雑誌名 青少年問題	6. 最初と最後の頁 22-27
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 石野由香里	4. 巻 16
2. 論文標題 演劇的手法を用いたボランティア活動の省察と変容の学習に関する研究 アクティブ・ラーニング、サービス・ラーニング等への適用に向けて	5. 発行年 2015年
3. 雑誌名 ボランティア学習研究	6. 最初と最後の頁 25-33
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 石野由香里	4. 巻 2015
2. 論文標題 他者の記憶を生き直す「聞きなぞり」の手法 高齢者のライフストーリーを演じ継ぐ	5. 発行年 2015年
3. 雑誌名 Social Design Review = 21世紀社会デザイン研究学会学会誌	6. 最初と最後の頁 104-116
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件 (うち招待講演 2件 / うち国際学会 2件)

1. 発表者名 石野由香里
2. 発表標題 ライフストーリーを演じ継ぐ実践に関する研究. 演者と観客の相互作用と変容をめぐって
3. 学会等名 日本社会教育学会研究大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 石野由香里
2. 発表標題 ライフストーリーを演じ継ぐ パフォーマンスエスノグラフィー実践として
3. 学会等名 日本生活学会研究発表大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 石野由香里
2. 発表標題 「聞きなぞり - 他者の記憶を生き直す」シンポジウム I (開催校企画)「アートベース・リサーチと演劇」
3. 学会等名 2017 日本演劇学会全国大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Yukari ISHINO
2. 発表標題 The effect of relative analysis of oneself and understanding another person by impersonation: The development of a method for recreating various scenes in real life situations through fieldwork
3. 学会等名 Drama Now! Conference 2016 (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 Yukari ISHINO
2. 発表標題 Arts Education
3. 学会等名 The Federation for Asian Cultural Promotion (FACP) CONFERENCE2016 (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 石野由香里
2. 発表標題 学生と地域住民の相互的学びに関する研究 ~ フレイレの意識化を応用したフォーラムシアターの手法を高齡化団地で用いた事例を通して
3. 学会等名 日本社会教育学会研究大会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 石野由香里
2. 発表標題 演劇的手法を用いたボランティア活動の省察と変容的学習に関する研究～アクティブ・ラーニング、サービスマーケティング等への適用に向けて
3. 学会等名 日本ボランティア学習学会（招待講演）
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 石野由香里
2. 発表標題 よそ者が他者を演じることで現場に対話を促すプロセスの検討
3. 学会等名 日本生活学会研究発表大会
4. 発表年 2015年

〔図書〕 計7件

1. 著者名 石野由香里	4. 発行年 2021年
2. 出版社 早稲田大学出版部	5. 総ページ数 312
3. 書名 他者の発見：演劇教育から人類学、ボランティアと地域活性論への架け橋（早稲田大学エウブラクシス叢書 29）	

1. 著者名 和崎春日、石野由香里、鈴木裕之、中野紀和、梅屋 潔、東 賢太郎、塩谷暁代、ほか	4. 発行年 2020年
2. 出版社 刀水書房	5. 総ページ数 830
3. 書名 響きあうフィールド，躍動する世界	

1. 著者名 川島裕子、中島裕昭、渡辺貴裕、高尾隆、鈴木直樹、中西紗織、田中龍三、石野由香里	4. 発行年 2017年
2. 出版社 フィルムアート社	5. 総ページ数 272
3. 書名 教師 になる劇場	

1. 著者名 早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター編、兵藤智佳、岩井雪乃、石野由香里	4. 発行年 2016年
2. 出版社 成文堂	5. 総ページ数 281
3. 書名 体験の言語化	

1. 著者名 李永淑編、小島祥美、川田虎男、荒井裕樹、加藤恵美、石野由香里	4. 発行年 2023年
2. 出版社 昭和堂	5. 総ページ数 272
3. 書名 モヤモヤのボランティア学：私・他者・社会の交差点に立つアクティブラーニング	

1. 著者名 田中雅文、柴田彩千子、宮地孝宜、山澤和子、石野由香里	4. 発行年 2023年
2. 出版社 学文社 (GAKUBUNSHA)	5. 総ページ数 192
3. 書名 生涯学習と地域づくりのハーモニー	

1. 著者名 岡原正幸編、荒井裕樹、山下香、小坂有資、石野由香里、今泉靖徳、槌本紘子、土屋大輔、後藤一樹、坪井聡志、荻野亮一、とみやまあゆみ、小倉康嗣、富田葵天、澤田唯人	4. 発行年 2020年
2. 出版社 晃洋書房	5. 総ページ数 368
3. 書名 アート・ライフ・社会学	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関